

戦争体験文庫第 63 回資料展示

空への憧れ～ある戦死飛行兵の資料から

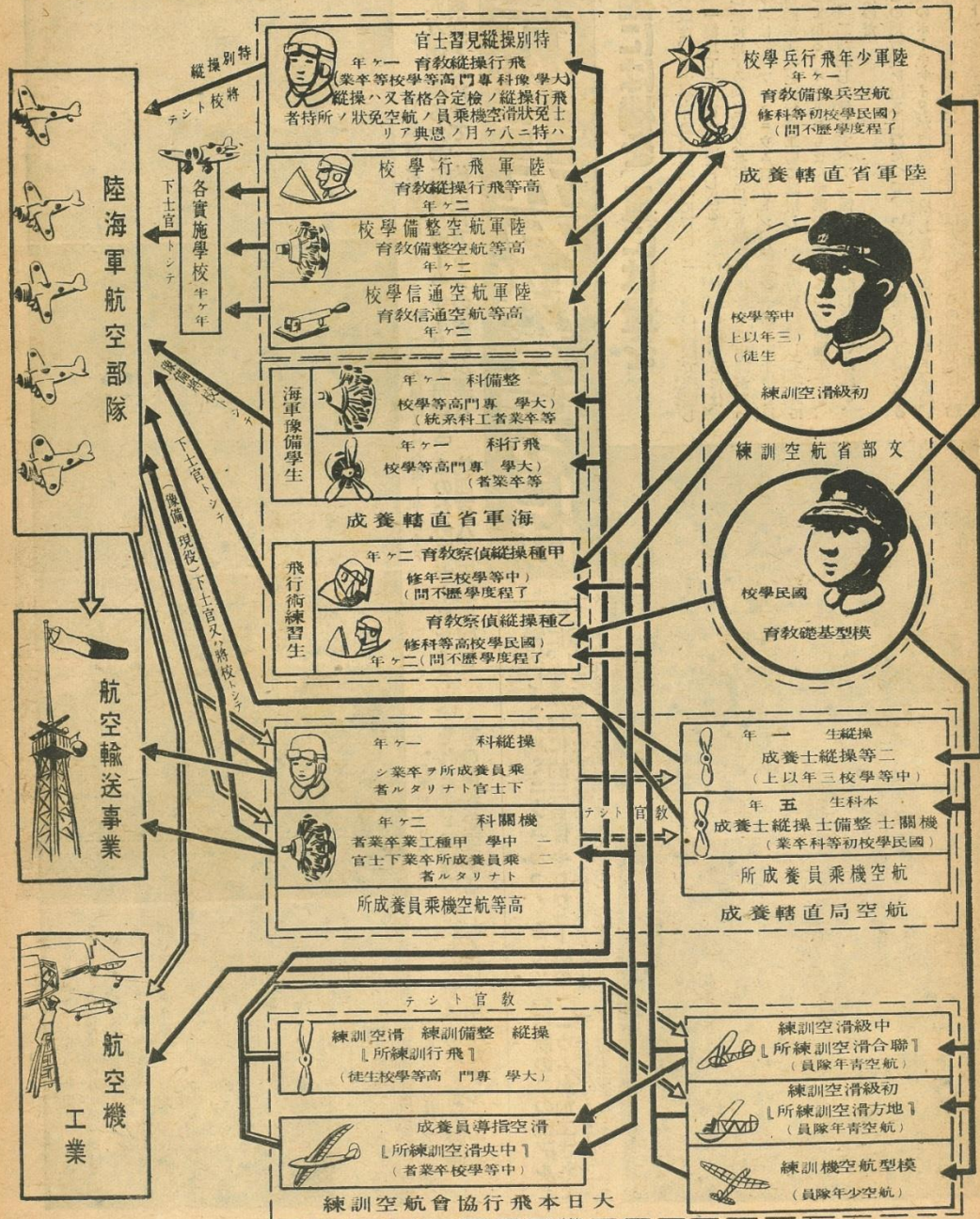


令和 5 年 7 月 1 日～10 月 29 日



今谷正一の日記類。上段左から東京陸軍航空学校在校中の①昭和 15 年 10 月 1 日～12 月 31 日のもの、熊谷陸軍飛行学校時代の②昭和 16 年 4 月 1 日から 12 月 31 日のもの、③17 年 1 月 1 日から 3 月 31 日のもの、④4 月 1 日から 11 月 20 日 (卒業式前日) のもの。下段左が⑤随想や回顧に加え昭和 17 年 11 月 21 日から 12 月 31 日の日記を収録した「在ル日」、その右上が⑥戦地での行動を記した昭和 19 年 6 月 4 日から 10 月 30 日までのもの、⑦10 月 31 日から出撃して未帰還となる前日の 11 月 9 日までのもの。

るあけだれこは道く行へ空が君諸年少青



昭和戦前期、多くの少年たちが空へと憧れました。上の図は政府が発行する『写真週報』289 号(1943.9)に掲載された昭和 18 年段階での航空関係事業へ進む諸課程です。これらの中でも特にローティーンの少年の心を捉えたのが昭和 4 年(1929)末に発足の海軍予科練習生(予科練、図だと中央部の海軍省直轄飛行術練習生)と昭和 8 年発足陸軍の少年飛行兵でした。というのは、これらの課程は小学校(図では国民学校)卒業程度の学歴で受験できましたが、他のルートだと中等学校(中学校・実業学校)への進学が必要になります。昭和十年代前半で男子中等学校進学率は大都市で 34%、町村部では 13%とされ(「誰が中等学校に進学したか」大阪大学教育学年報 2、1997)大きなハードルでした。とはいえ、予科練や陸軍飛行兵は人気が高い分競争率も高く、適性に加え相対的にずば抜けた学力と体力が必要とされたのは言うまでもありません。



今回紹介する今谷正一は、現奈良県山添村出身で、昭和 15 年 4 月に東京立川の東京陸軍航空学校(1 頁右上の陸軍少年飛行兵学校に相当)に入学、翌年から埼玉県熊谷の陸軍飛行学校を経て、念願のパイロットとなります。昭和 19 年にフィリピンで戦死していますが、小学校時代の親友の悔やみによれば、「俺は少年航空兵に行こうと思うが駄目だろうなと云っていた」といい、自身のアルバムには、東京陸軍航空学校の校門写真に「青少年ノ憧憬ノ的」と記し、入校式の写真には「記憶せよ！今之感激！！」と記し、在学中の日誌にもパイロットへの強いこだわりが見えます。

一 懐しの日記 記 (日記ト共ニ)

十一月二十一日

卒業式 (三年ノ古ラ也)

起床、ラッパノ音ニ 床ヲ跳ル。
 之が最後カト思ヘバ自然ト否ナントナ
 クヘンナキニナリ 氣合ガ入ル
 今日ハ卒業ダ ト、感ハサ程 シナイレド
 七三十二(年) 同ノ、楽シイ 昔シイ 愉快
 ナレ 卒業生活トモ最後 別レルノダト
 思ヘバ、ヤハリ 懐シクモナリ 嬉シクモナル
 静ニ過ゼン日ヲ願ル
 軍隊生活ニ関シテ寸分モ認識セザル我々が
 憧レ、東京港軍航空学校ニ入校シ
 ア、純竹大尉、下ニ肥田留田中尉 ソコニ
 當時東航、鬼トモデ梅セラレシ 梅高曹長
 ヲ改習班長ニ、軍隊生活ハ、第一歩ヲ印
 付。 時々 コラツ 貴族 コツキ来スト、イキ
 ナリ 線上 親ガ カツン、之が彼特有ノ、夜
 育ヲ、ソコニ 梅高流 触れ得、軍隊内 勢力
 友育ハ 織リ込マテ行ク、デヤラウ。
 十五年 四月十日、入校式 亦、あき 六、七日
 頃ト記憶シタル、青黒 トリビ、私服

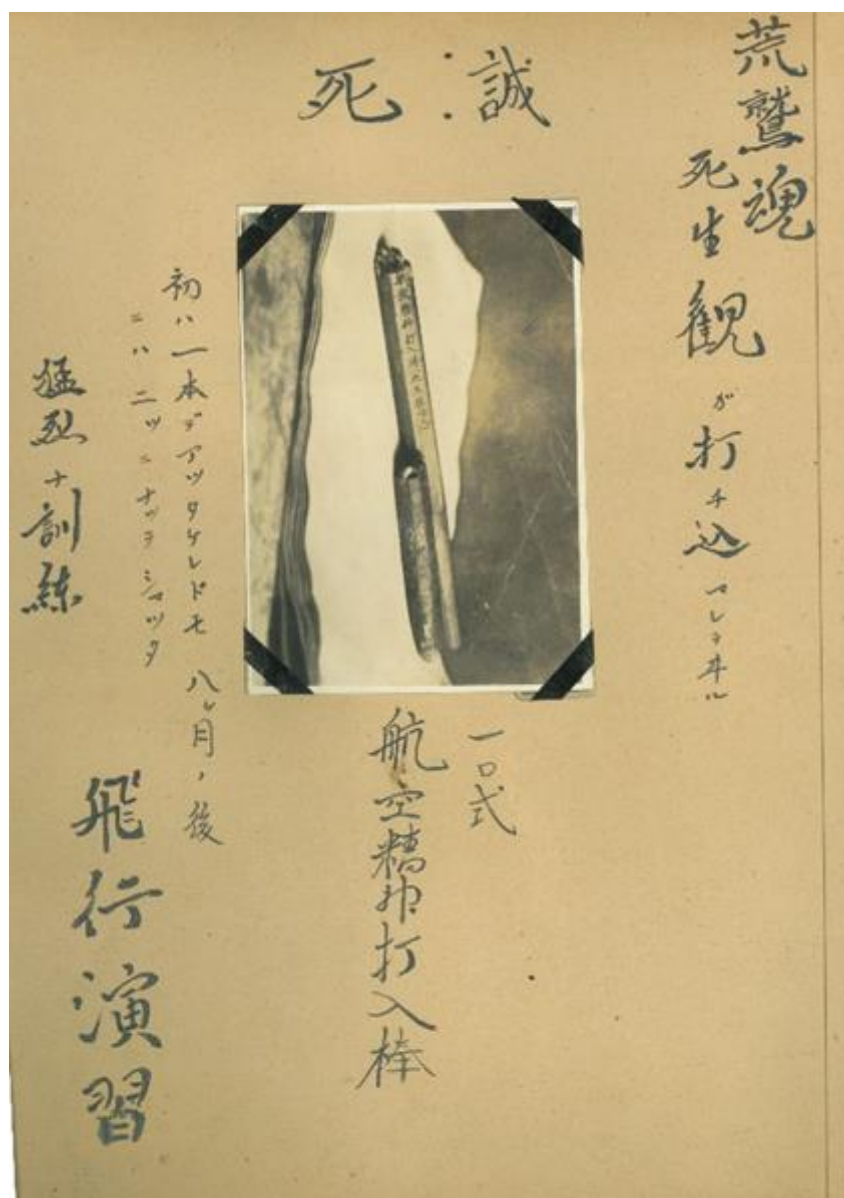
2

ヲ身ニ 胸ヲ躍ラセ、入校 命令ヲ待ツ我等
 ニ 鬼曹長 相変ラズ、悪イ人想ガ入テ来
 全教 寝台、上ニ生シト云フ、心ニ感ヲ抱キツ、
 制ガ儘ニル、枕ヲ兩子ニ寄シテ、又ハ、
 時、ト共ニ平ガ、ル、ナニツノ野郎
 ト竹カノ音、頭中ニ 冷水ノ流シ込ム如シ
 終テ日ヲ
 俺ハ、コノ東航デ一番 恐シイ班長ダ、
 キツ様、ラガニ直ニ 命令 行
 動スルバ 東航デ一番 優シイ班長デ、告グト
 之カ入校式、初メ、憧レノ軍服ヲ着、一寸
 偉クナツ様、ナ氣ガ、被服、名梅、ツカラ
 ナイ、袴、下ヲ、惚ルニ、ドウモ頭入ラン、
 思ヒ出シ、蚕ノゴシ、タ惚、忘レルト、蚕ヲ想ヒ
 出シ、下ノ名ヲキウジテ、頭入レタコトガ、
 軍隊、仲ニ、難シク、惚ル、俺ハ、ユナナ、
 生活、
 牛、特ニ、毎朝、起床、コノ時、コノ、ア、ム、
 カ、ト、泣キ、タイ、様、ナ氣ガ、るコトモ、少カラズ、
 田金、山中ニ、育、自、今、ハ、何、要、領、モ、
 ラナカッタ、今、カ、ラ、見、バ、否、當時、教、会、ニ、育、
 者、カ、ラ、見、レ、バ、馬、鹿、正、正、見、エ、タ、デ、ア、ラ、ウ、
 然、シ、ソ、レ、ガ、或、方、面、ニ、善、ト、ナ、ツ、テ、現、レ、タ、カ、モ、知、
 以、ガ

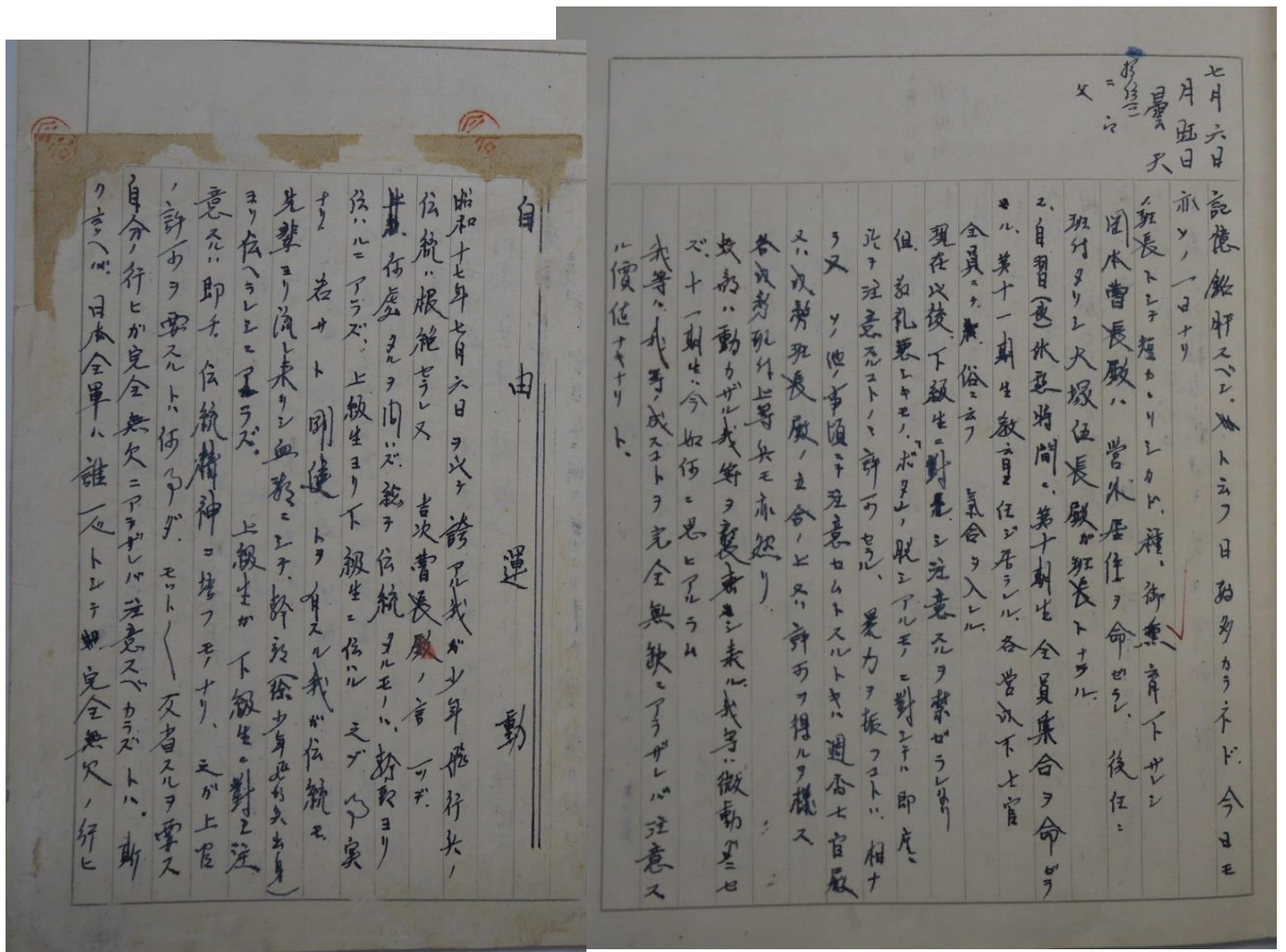
もちろん軍隊生活は厳しいものでした。4 頁に示した回顧でも、いきなり「貴様こっちに來い」と怒鳴られ蹴り飛ばされるなど、続けて「特ニ毎朝ノ起床、コノ時コソハ泣キタイコトモ少カラズ」といった回顧が見えます。また、軍隊でズボン下を「袴下(こした)」と呼ぶのが頭に入らないので、家で見た蚕のコシタ(糞のこと)を思い出していたとも振り返っています。

正一は上官の眼が入ることが想定されている日誌にも率直にものを書く性格だったようです。例えば、昭和 15 年 10 月 8 日の日誌には、銃の手入れにつき「分解掃除ハ面倒ナルモ精神ニ汚レノ生ヂザル如ク毎日懇ニ手入ス」と記しています。これに対して、検閲官たる班長は「面倒ナルモ」を見とがめて、「コノ心ヲ捨テヨ面倒ナラバ食モスナ」と「教育」的指導を赤ペンで書きこんでいます。

さらに熊谷進学後には、しばしば日誌に貼りが付されているところが見えるようになります。この貼り紙の下では、学校のやり方に批判的なことが記されていることがほとんどです。もっとも、貼り紙は剥がされていることが多く、どこまで検閲逃れとして機能したのかは疑問です。



これが顕著なのは、貼り紙のない部分に「記憶銘肝スベキト云フ日数多カラネド今日モ亦ソノ一日ナリ」と記した昭和17年7月6日の日誌です。この日、正一ら10期生全員が集められ、下士官から「下級生ニ対シ注意スルヲ禁ゼラレ」、暴力も禁じられ、ボタンが留められていない以外の注意を下級生にする際には、週番士官や内務班長立会いの下でするように、という指示が出されています。下級生に対するいわゆる「しごき」の禁止です。しごきの内容を類推させるものとして、アルバムには「一〇式航空精神打入棒」の写真があります。精神棒とは「海軍で上級者が下級者の尻を叩くためのこん棒のこと」（寺田近雄著『完本日本軍隊用語集』学研パブリッシング、2011）といい、写真に正一は「荒鷲魂死生観ガ打チ込マレテキル」「初ハー本デアッタケレドモ七八ヶ月ノ後ニハニツニナッテシマッタ」と肯定的、ユーモラスに記します。「一〇式」は三八式歩兵銃、零式戦闘機等の兵器等の規格を年次で示すのをもじって、10期生によることを意味するものと思われます。こうした注意、しごきが禁じられたことに対し、正一は貼り紙の下で「誇アル我が少年飛行兵ノ伝統ハ根絶セラレヌ」「十年五十年後ノ皇軍ガ案ゼラレル」と厳しい言葉を使って、この指示に対する反発を記しています。



タシエアルハ、無上ト確信ス。ヤレ、注意ヲサシナイデ、育
 ナリク、国軍ハ、將東、如、何ニモ、尤、三、十、年、東、ノ
 此、ハ、タル、辰、史、モ、信、欽、モ、地、ニ、著、テ、シ、ス、ウ、テ、ア、ラ、
 外、部、ト、エ、テ、新、下、ラ、比、ル、注、意、ス、ル、火、上、ハ、確、固、タル、信
 心、上、ニ、道、理、ニ、合、サ、ス、ル、事、ス
 予、ハ、六、日、ノ、格、納、庫、一、周、ノ、早、馳、ガ、辛、ウ、モ、無、イ、
 ガ、吉、次、定、田、曹、長、田、畑、軍、曹、大、隊、伍、長、ノ、如、キ、
 人、等、ガ、我、國、軍、ニ、自、リ、ト、ス、ル、十、年、五、十、年、後、ノ
 皇、軍、ハ、案、サ、ラ、レ、ル、
 三、浦、中、尉、殿、佐、後、軍、曹、殿、ノ、如、キ、方、々、デ、ア、レ、バ、
 將、東、ノ、皇、軍、ハ、精、銳、ソ、ノ、モ、ト、ナ、ル、コ、ト、ラ、確、信、ス、
 幹、部、ガ、中、ニ、合、セ、テ、
 吉、次、イ、官、長、來、ニ、何、カ、言、フ、コ、ト、ナ、イ、カ、俺、ハ、聲、ガ、豚、目、カ、
 ナ、テ、言、ヒ、ツ、注、意、エ、テ、地、行、兵、ガ、何、ト、思、フ、カ、
 友、人、ノ、カ、コ、一、ツ、也、叫、ブ、コ、ト、ヲ、申、シ、合、セ、テ、
 矢、ノ、前、デ、ド、ナ、リ、モ、ソ、ノ、効、果、ハ、〇、ダ、

如、キ、タ、ラ、ン、者、ハ、コ、ダ、ノ、修、養、ヲ、受、
 六、日、注、意、ハ、娘、ノ、嗚、キ、聲、ニ、等、シ、

A

二郎君
 御も紙有難う元氣とつてあこ
 うな僕も元氣に頑張つてゐる。
 而も君の就業の件、俺も種々と頭を
 悩ました。
 自分はお前に對しては何も決定的な
 言は言はない。かゝる一は、現在迄の考へを
 話す。
 我が今存家の将来は必ず君の手に
 入るであらうから此の点迄考へてくれ
 何も軍人にならなといふのではなないが、
 少く航空兵を希望して居る由だが、
 俺はどうかと思ふ、授験するならば陸軍、
 よりも海軍を、陸軍は末は短く、海軍は長
 かりな俺なんが、それまでいゝをよ
 然し海軍のうちは俺にはからないが、
 お前の様に誰でも一生を決する時には
 兎角血氣にはやり易い、心を元分
 落着けて、一時的宣伝にとつては、
 大局の着眼して決すべきだ、俺もそり
 當時は廣告のみに心を奪れ、
 この未だ、今はあしも落膽はして
 おない、むしろ長んでゐる。

B

それで君の渡満、佳園は俺には及
 りつかぬ見上げた決心だが、やはり
 冷静な態度であつてくれ、然し
 鉄道員の名前には賛成だ。
 俺はお前に強ひて職業を何れに
 せよとは一言も言はない、何故なら
 ば、お前の嫌いなものを強めても
 却つて君を谷底へ落す
 様だからだ、お前に最も適當
 なものは、お前の最も好きな仕
 だが、然し、怒、彼共の立派になつて
 はならぬ、
 父母や先生、近親によし話をして
 決してくれ、お前の大いだ
 再い言ふ
 お前は、今存家を經ぐつてあるから
 その英元分考慮し、且心の動
 かされ易い、特、しつかり、
 落着いた、井田の力を入れたら
 決しては、いゝ、たい之を、
 俺のお前の對する、頼んだ。



七月一日 (月) 暑く晴
 ビストロ小説 白蘭の歌 ナルモノヲ
 一日中 讀ミテ日ヲ終ル 讀ムニツレ
 遠イ故郷ヲ思ヒ 義勇軍ノ事
 が書テアレバ 二郎ヲ思ヒ出ス 後ト
 ハ十七年ノ正月 應接デ別レタリが最
 後デモウ 二年キニナル アレが永久ノ
 訣別デ アツキアウリ 俺モ奴
 グライ 心が 出来テ 居ルハ モット 優秀
 ナト 士官ニ 吾人ハ ナレルノ ヲウウが
 夜ニ 止マズ

家族への手紙となると、また違った側面から率直さが見えてきます。兄に続こうとする二郎に対しては、喜ぶどころか「少年航空兵を志願して居る由だが俺はどうかと思ふ。授(ママ)験するなら陸軍よりも海軍だ、陸軍は先が短い、准尉迄位だからな」「君の渡満の雄図は俺には及びもつかぬ、見上げた決心だ、がやはり冷静な態度で考へてくれ、然し鉄道員の志願には賛成だ」として、郷里に残ることを勧めています。しかしこの願いは届きませんでした。台湾の正一から、満洲国北安省の青少年義勇軍高根訓練所の二郎に宛てた手紙や、日の丸の寄書きを手にした二郎と思しき少年が「満蒙開拓青少年義勇軍」のたすきをかけ、家の前で記念撮影をしている写真も残っており、昭和19年7月10日の日誌には、満州を舞台にした久米正雄の小説「白蘭の歌」を読んで、「義勇軍ノ事ガ書イテアレバ二郎ヲ思ヒ出ス」といった表記も見えます。

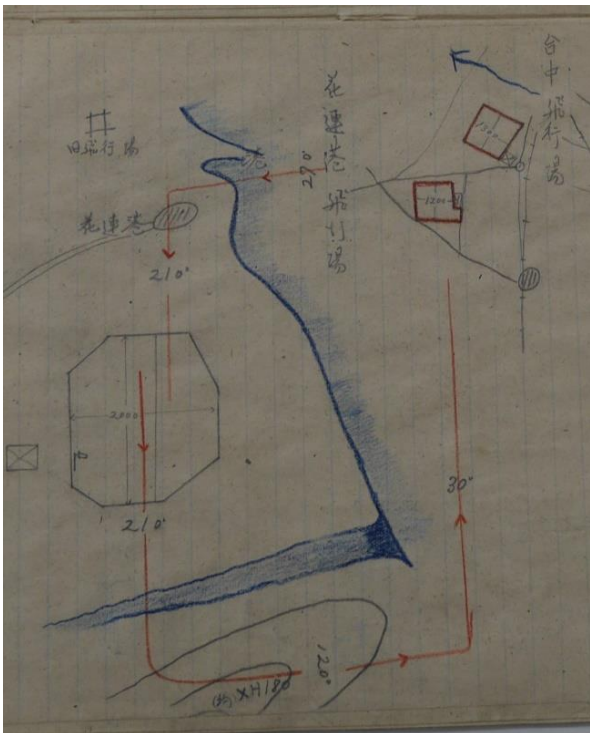
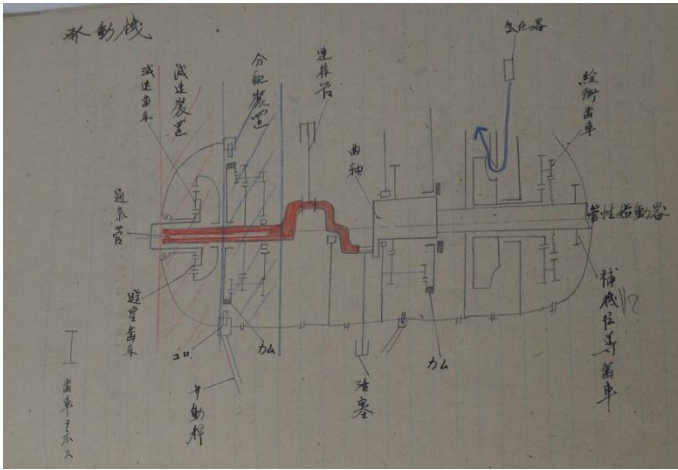


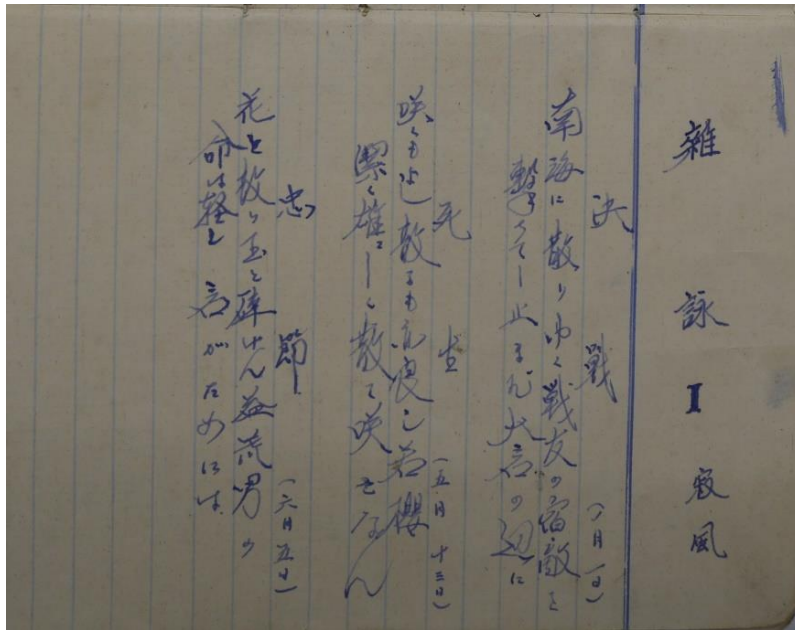
悲しみの裏に
 夕の戦終て
 凱歌すれば
 楽！ 周樂
 あつた
 火鉢を中心
 笑、花、心



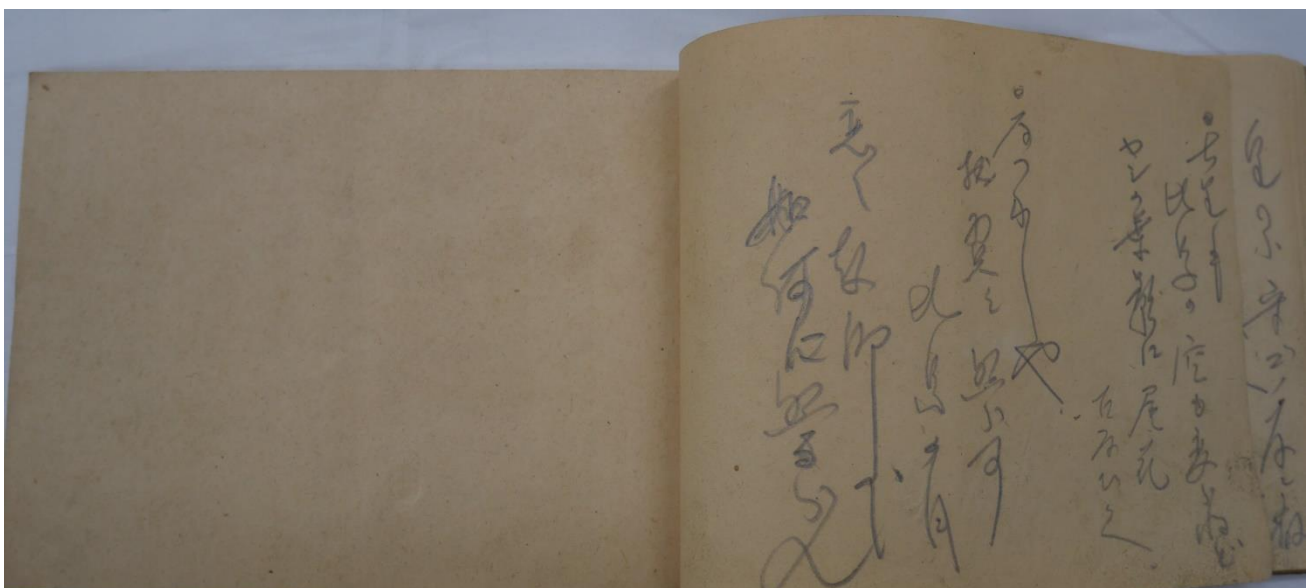
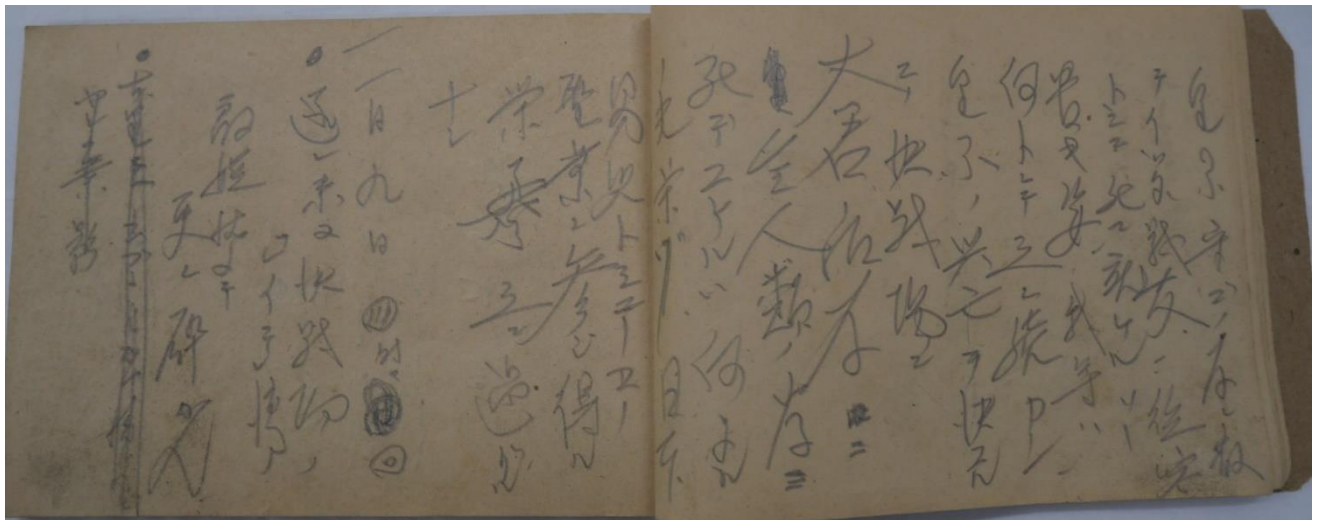
想ひ出の日
 學窓ヲ後
 清く、美く、雄く
 散々若櫻
 大空に！
 懐しの面影
 17.11.21

こうした面はあるにせよ、東京時代
 1冊、熊谷時代3冊の日誌を見ると
 自身がパイロットになるという強い
 目的意識に裏打ちされて、軍隊生
 活に順応し、順調に課程をこなし
 ていきました。昭和17年11月21
 日に熊谷陸軍飛行学校を卒業、ごく
 短期間の帰郷を経て、12月から
 は台湾に赴任します。日誌等がない
 昭和18年前半の足跡は不明で
 すが、最終頁に示した相沢寅四郎
 部隊長から遺族に宛てた手紙によ
 ると、7月に偵察隊から戦闘隊に転
 じると同時に威第11071部隊こと飛
 行第204戦隊に転属となります。当
 時部隊はインドシナ半島周辺を中
 心に展開していました(『戦友会誌』
 総集編、飛行二〇四会、1988)。





昭和 19 年 6 月 4 日からまた日誌が見えるようになります。冒頭には「雑詠I」として 3 首の歌が書き込まれており、いずれも自らの戦死を強く意識するもので、かつては飛行兵を目指す動機として否定した「国家概念」についても、「君」や「大君」のための死という位置づけをするようになっていきます。こうした傾向は 20 歳の誕生日を迎えた 9 月 23 日の所感にも顕著です。



戦争体験文庫資料展示一覧表		
回次	期間	展示テーマ
第7回	平成18年12月1日～19年1月30日	軍隊と地域1 戦地・占領地での軍隊 ビラと軍票
第8回	平成19年2月1日～3月29日	軍隊と地域2 村と軍隊 村役場/在郷軍人会
第9回	平成19年3月31日～6月28日	軍隊と地域3 村と軍隊2 勤労・増産・金属回収
第10回	平成19年6月30日～9月27日	軍隊と地域4 奈良の戦争遺跡 奈良聯隊 奈良海軍航空隊
第11回	平成19年9月29日～12月27日	戦争と手紙1 出征
第12回	平成20年1月5日～3月27日	戦争と手紙2 戦地からの手紙
第13回	平成20年3月28日～6月26日	戦争と手紙3 戦地への手紙
第14回	平成20年6月28日～9月28日	戦争と手紙4 帰還
第15回	平成20年10月1日～12月27日	子どもたちが見た満州1 満州修学旅行
第16回	平成21年1月6日～3月29日	子どもたちが見た満州2 満州建設勤労奉仕隊・満蒙開拓青少年義勇軍
第17回	平成21年4月1日～6月28日	戦争と食べもの1 米の配給と供出
第18回	平成21年7月1日～9月29日	戦争と食べもの2 野菜
第19回	平成21年10月1日～12月27日	戦争と食べもの3 調味料
第20回	平成22年1月5日～3月30日	戦争と食べもの4 代用食
第21回	平成22年4月1日～6月29日	就職先としての軍隊 海軍志願兵
第22回	平成22年7月1日～9月29日	進学先としての軍隊 陸軍士官学校、海軍兵学校
第23回	平成22年10月8日～12月26日	工廠 国営兵器工場
第24回	平成23年1月5日～4月17日	貯蓄報国
第25回	平成23年4月19日～6月29日	大和の隣組 戦争を支えた地域組織
第26回	平成23年7月1日～9月29日	大和錦 在郷軍人会奈良支部の活動
第27回	平成23年10月1日～12月27日	産業組合から農協へ 戦時・戦後の協同組合の再編
第28回	平成24年1月4日～3月31日	赤十字 その成り立ちと展開
第29回	平成24年4月1日～6月28日	8.15で終わらなかった戦争 日赤奈良班看護婦の手記から①
第30回	平成24年6月30日～9月27日	灼熱の陽の光の下で 日赤奈良班看護婦の手記から②
第31回	平成24年9月29日～12月27日	病院船の上で 日赤奈良班看護婦の手記から③
第32回	平成25年1月5日～3月28日	原爆の惨禍を目のあたりにして 日赤奈良班看護婦の手記から④
第33回	平成25年3月30日～6月27日	かるたで読む「戦陣訓」
第34回	平成25年6月29日～9月29日	小学生国史受験かるたの世界
第35回	平成25年10月3日～12月27日	大淀町学校支援地域本部 戦争カルタの世界
第36回	平成26年1月5日～3月27日	愛国百人一首を読む
第37回	平成26年3月29日～6月26日	日本統治下サイパンの日常から戦争へ 須藤氏手記1
第38回	平成26年6月28日～9月28日	爆撃の中の逃避行 須藤氏手記2
第39回	平成26年10月1日～12月27日	壕からかいみたま日本兵と米兵たち 須藤氏手記3
第40回	平成27年1月6日～3月29日	極限の日々から 須藤氏手記4
第41回	平成27年4月1日～9月27日	あの日から70年 追想の8.15
第42回	平成27年10月1日～28年3月30日	進駐軍と奈良 <i>Occupied Nara</i>
第43回	平成27年4月1日～7月19日	昭和15(1940)年、紀元2600年祭 -あなたは知っていますか?-
第44回	平成27年7月20日～11月30日	「奈良連隊」がいた光景
第45回	平成28年12月1日～29年3月30日	陸軍少年兵
第46回	平成29年4月1日～7月27日	戦勝記念図書館の記憶/記録
第47回	平成29年7月29日～12月27日	鉄道連隊
第48回	平成30年1月5日～3月29日	民博所蔵戦時債権の世界
第49回	平成30年3月31日～8月30日	陸軍特別大演習 於奈良・大阪
第50回	平成30年9月1日～12月27日	日清・日露戦争と奈良(「明治150年大和から奈良へ」の一部として)
第51回	平成31年1月5日～4月30日	昭和8年12月23日「祝皇太子殿下御生誕」の時代
第52回	令和元年5月1日～8月29日	墨塗り教科書
第53回	令和元年9月1日～2年2月27日	聯隊区司令部
第54回	令和2年2月29日～6月28日	日中戦争
第55回	令和2年10月1日～3年1月28日	昭和13年の第3機関銃中隊1 ～部隊陣中日誌から
第56回	令和3年1月30日～4月29日	昭和13年の第3機関銃中隊2 ～部隊陣中日誌から
第57回	令和3年7月1日～10月28日	愛国と国防の相克 ～国防婦人会奈良本部と「大和婦人」
第58回	令和3年10月30日～4年2月24日	昭和13年の第3機関銃中隊3 ～部隊陣中日誌から
第59回	令和4年2月29日～6月29日	「奉祝国民歌紀元二千六百年」を“読む”
第60回	令和4年7月1日～11月11日	山口甚佐久撮影昭和十年代橿原周辺大和史蹟等アルバムより
第61回	令和4年11月12日～5年3月5日	『古都の弔旗』を読む
第62回	令和5年3月5日～6月29日	奈良県の招魂社と護国神社
		2023年7月 奈良県立図書情報館編・発行 同11月12日2刷